

胎児輸血を必要とした抗 Jr^a 陽性妊娠の 1 例

◎清川 知子¹⁾、中山 小太郎純友¹⁾、細川 美香¹⁾、櫻木 美基子¹⁾、森川 珠世¹⁾、永峰 啓丞¹⁾
国立大学法人 大阪大学医学部附属病院¹⁾

【はじめに】

抗 Jr^a は高頻度抗原に対する抗体であり妊娠歴のある女性に多く検出される。胎児貧血を認める症例もあれば認めない症例もあり詳しいメカニズムはわかっていない。今回、我々は第 2 子では胎児貧血を認めず、第 3 子妊娠中に胎児貧血を認めたため胎児輸血を実施した症例を報告する。

【症例と臨床経過】

症例の母親は 30 代。2 経妊、2 経産。第 2 子妊娠時に抗 Jr^a が検出され当院に転院された。その時の抗体価は 1,024 倍。第 2 子は出生後軽度の貧血を認めたが経過観察後退院している。今回、第 3 子を妊娠したため当院で経過観察を行った。

母親は O 型 RhD 陽性、血漿中に抗 Jr^a を認めた。IgG サブクラスは IgG1。抗 Jr^a の抗体価は 14 週 128 倍、24 週 128 倍、27 週 512 倍、MCA-PSV55cm/s (1.5MoM)以上となり 28 週に胎児輸血となった。O 型 Jr^a 陰性 RBC を Ht.約 90%に調整し、約 50ml 輸血した。輸血前の胎児の検査結果は Hb.6.8g/dl、Ht.19.4%と重度の貧血を認めた。輸血後の検

査結果は採血出来なかったため測定できていないが、MCA-PSV は 35cm/s であったため、貧血は改善できたと考えられた。その後胎児貧血を確認していたが、33 週に MCA-PSV75cm/s(1.6MoM) と再び上昇したため翌日誘発分娩となった。在胎週数 33w5d、出生体重 2,298 g、Apgar score 8/9。児の血液型は A 型 RhD 陽性、DAT(w+)、血漿中および解離液中に抗 Jr^a を認めた。出生時の Hb.は 9.0 g/dl と貧血を認めたが溶血性の貧血ではなく、黄疸の悪化もなかった。日齢 2.3 に光線療法を実施し、日齢 3 にエボジンを使用、現在経過観察中である。

【まとめ】

抗 Jr^a による胎児貧血では、溶血所見は軽度であることが知られている。本例も輸血が必要な重篤な貧血を発症したが、溶血は認めず、抗 Jr^a による赤血球造血抑制が関与していると考えられた。

連絡先 06-6879-5881